

## 問答法と時——『政治家』における雛型と適度

高橋 雅人

### はじめに

後期対話篇ではプラトンが時を意識しているように思われる。例えば『ティマイオス』では永遠の似像としての時間の創造が語られる。『法律』第一・二巻における舞踊の重視は、『国家』においてハルモニア（音階）が重要な関心事であったことから変化して、身体運動を含むリズムへの関心が増したと捉えることができよう。『ピレボス』では身体における快楽が身体の周期的な変化に応じて生ずると分析されるのみならず、快楽における記憶の果たす役割の大きさが指摘される。記憶とは時を離れてはいただろう。『政治家』においてはそれなしには技術がないと主張される適度の一つとして、適時が語られる。政治術の一つの大きな仕事として、統帥術を用いるべきかどうか、すなわち戦争を行う時かどうかを判断することがあると指摘される。

だが、問答法が最終的に対象とするのがアイデアないし有であるならば、それら静のうちにあると思われるものを捉える問答法が動と離れては考えられない時といかにして切り結ぶのか。そのことを理解したいというのが、本発表の目指すところである。そのためには、問答法とは何か、どのような方法なのかを把握する必要があるだろう。それには『政治家』が取り上げるのが良いと思われる。この対話篇は方法論的反省に満ちているからである。以下、1節でエレアからの客人（以下、客人）と若いソクラテスが陥った、夢と目覚めによって説明される事態を分析した上で、2節で雛型（*παράδειγμα*）と雛型の雛型について検討を加え、3節で適度と適時について考察し、問答法と時がいかなる仕方で関連し合うのかについて考えてみたい。

### 1: 夢と目覚め

政治術とは何であるかの探究が、政治術は養育だと定めることで頓挫した後、失地挽回を図るべく数奇な三つの伝説に基づく物語を語ったものの、その不出来に心を痛めたエレアからの客人は、我々の置かれた知の奇妙な状況を、夢の中では知っていると思っているが、目覚めてみると何も知らないという状態だと託つ（277d）。以下、政治家の真の姿を明らかにする議論は傍に置かれ、雛型や適度をめぐる議論が続けられる。方法論的反省を告げる夢と目覚めに訴える客人の言葉は、いったいどのような意味があるのだろうか。

夢と目覚めとの対比はプラトンの対話篇ではしばしば見られるが、ここでは『国家』のそれと比較してみよう。『国家』（5. 476c-d）によれば、目覚めている者は、アイデアの存在

を認め、アイデアとアイデアを分有するものを識別できる。逆に、夢見ている者は、アイデアの存在を認めることができない。彼らは、アイデアを分有するに過ぎないものをまるでアイデアであるかのように絶対的な存在として受け取る。

このように截然と区別される二つの状態だが、果たして夢見ている状態から目覚めている状態への移行はどのようにして可能なのだろうか。この点を考えるために我々が想起すべきは、『国家』における能力論である。それはまさしく、夢を見ている者と目覚めている者を区別した後の文脈で出てくる。その議論によれば、能力は何に関わるかというその対象と、何を成し遂げるかというその成果によってのみ区別される (5. 477d)。この指摘に従って、あるもの ( $\tau\acute{o} \acute{o}\nu$ ) には知が、ありかつないもの ( $\tau\acute{o} \acute{o}\nu \tau\epsilon \kappa\alpha\iota \mu\grave{\eta} \acute{o}\nu$ ) には思いなしが割り当てられることになる。対象と能力の言わば密着は、対象の確実性と魂の状態の明確性とを対応させ、それを線分の長さによって表す線分の比喩でも改めて確認できる (6. 511e)。

しかしながら、以上のように対象と能力とが相即しているとするならば、夢の状態から目覚めの状態へ、線分の比喩の言葉を使えば感覚されうるもの・思いなされうるものから知られうるものへの移行は簡単ではなかろう。『国家』を読む我々は皆知っている、簡単ではないからこそその移行は強制による、と。なるほど相反する現れが知性を呼び出すということはあるだろう。それが三本指 (7. 523b-524d) の示すところだ。しかし感覚情報の不整合に基づいて、その感覚が対象としているところのものそのものが「何であるか」を問うということは、誰にでもそう簡単にはできることではあるまい。どちらが重いか判断がつかかねている人に必要なのはさしあたって秤であって、重さとは何かという哲学的問いではない。洞窟の比喩で語られているように、洞窟を出て地上の世界へ至るには、洞窟の内部に影を投げかける模像のそれぞれが「何であるか」強制的に答えさせられ、さらに苦痛に満ちた険しい登攀が必要とされるのである。

『政治家』ではどのように語られているだろうか。夢の中では何でも知っていると思っていたが、目覚めてみるとあらゆることに無知であるような事態は、「我々のうちの誰にでも」生じうることと述べられているが、この客人の述懐は、客人と若いソクラテスとが陥ってしまった状況も当然指しているだろう。つまり彼らは政治家を養育者として捉えるところまで議論がうまく進んでいると思っていたが、その誤りに気づいたのである。ここには『国家』の夢と目覚めとの区別において重要だったアイデアについては、語られていないと言ってよいだろう。分割の途上に出てきた諸々のエイダスは、超越的なアイデアとみなす必要はないからである<sup>1</sup>。

ではなぜ客人は、政治家を養育者として捉えていることが間違いだったと気づき、夢から覚めることができたのか。それは分割の結果と不整合が生じたからであろう。政治術が

---

<sup>1</sup> Cf. 加藤信朗, 1992, 57-8.

自ら命令する技術であるのに、政治家は牛飼いと同一ような養育者として現れてしまった。彼ら牛飼いは食事、繁殖、気持ちを穏やかにすることなど、牛に関わるありとあらゆる世話を自分で行う。ところが、分割の最初の方で政治術は命令する技術に配当されていた。これは明らかに不整合である。

ここに至るまでの政治術の分割を簡単に振り返ろう。政治術は自ら命令する知識と規定された後、その命令が何に対してなされるかの分割がなされ、最終的に人間を養育する技術とされる。この間、客人は、政治術が人間を対象とするのは当たり前だと思われるのに、動物飼育術を二つに分ける際に若いソクラテスが人間をいきなり切り分けたことに苦言を呈する。エイドスに従って分割をしなければならないのに、動物から人間だけを取り分ける不均衡な分割はエイドスを逃す危険があるという理由からである。その危険を避けるためには、できる限り半分に分けるのがよいと、客人は若いソクラテスに勧める。この教訓は、それ自体としては有意義なものであるとしても、いささか時宜を失しているとも言えるかもしれない。というのも、もし若いソクラテスがしたように、直ちに人間だけを切り分けていれば、政治術を一種の養育術と捉えることの奇妙さにもっと早く気付いていたかもしれないからである。あるいはむしろ、人間をすぐに切り分けなかったからこそ、政治術を養育術として捉えることの奇妙さに気づくことができたと言ふべきなのだろうか。いづれにしても、分割の筋がずれてしまったことに客人が気づいたことが、夢の中で知っていたと思っていたにすぎず、実は目覚めたら知らなかったという言葉で言われている事態のことである。

この誤りから議論を立て直す第一歩は、養育から世話に名を変更することである。「同種の者の全員に漏れなく適用できるような名称を何か選んで、それを政治家につけるべき(275e)」で、面倒を見るということは全員に共通のものと認識し、そのような名前をつけるべきだったからである。選ばれたのは「世話」という名称である。こうしたところで、養育者の中から政治家を直ちに切り分けることはできない。人間の世話に関わることを行う他の全ての人々から逃れるわけではないのだ。それゆえ、この措置はむしろ誤りをあえて残していると見るべきではないだろうか。議論が進むと、原因と副原因の区別の必要が述べられ、政治家から様々な職人を切り離すということが行われる。これは政治家の姿を明らかにする過程の一環である。その意味で、この誤りは意味のないことではなかったと言えるだろう。

だがすでに述べたように、客人が、政治家とは誰のことかという問いに戻り、原因と副原因の区別を行うのはまだ先の話である。そこに至る前に、この苦境から抜け出すためには雛型が必要であること、そして苦境そのものの説明のために雛型の雛型が必要であることを客人は述べる。では雛型とは、また雛型の雛型とはどのようなものなのか。節を改めて検討していこう。

## 2: 雛型、雛型の雛型

夢と目覚めについての客人の言葉に合点のいかなかった若いソクラテスはそれがどういう意味なのかを尋ねるが、客人はさらに謎めいた仕方で、雛型が雛型を必要としていると口にする。さらに説明を求める若いソクラテスに対して、客人が語るのが児童の字母の学習の様子である。客人によれば、児童は字母を識別できていたとしても、より複雑な文字列の中ではそれができなくなることがある。そのような状態から抜け出るために、教師は識別できる簡単な文字列を選定し、それを複雑な文字列と対比させるという。雛型の成立について、参照すべきテキストは以下の通りである。

**エレアからの客人** まず彼らがそのうちにおいてそれらは同じものだと正しく思いなしたものと導くこと、導いたらまだ知られていないものと並置すること、そして比較して同じ類似性と本性が両方の字母の組み合わせのうちにあることを示すこと、全ての知られていないものに正しく思いなされるものが並置され示されるまで（こういうことを行い）、そして示されたなら、雛型がこうして生じるので、全ての音節における全ての字母のそれぞれについて、これは他の字母とは異なるから異なると、またこれは常に同じものに即してそれ自体と同じであるから同じであると呼ばれるようにするのだ。

**若いソクラテス** 全くもってその通りです。

**エレアからの客人** ではこのことを我々は十分に把握したのだろうか、つまり、異なった、離れている（*διεσπασμένω*）ものの中で同じであると正しく思いなされたものが集められ、双方のそれぞれと両者に関して、一つの真なる思いを完成させる時、その時、雛型ができあがると。

**若いソクラテス** 明らかにそうです。(278a8–278c7)

この箇所での疑問は二つある。一つは雛型の成立と同一性と差異性の認識とが同時であると言われていることである。しかし機織り術が政治術の雛型として取り上げられる時、果たしてその両者における同一性と差異性とは既に了解済みだったのか。もしそうなら客人のしていることは探究ではなく、単なる知識の伝達であるということになりはしないか。もう一つは雛型を用いて得られるものが知識ではなくて、真なる思いである点である。

これら二つの疑問を抱えつつ、まずは雛型の雛型の理解を進めよう。客人の語る、児童が導かれる字母の学習とはどういうものなのだろうか。

次のような例を考えてみる。児童が“Σ”という文字を学ぶとしよう。児童は、その形や発音を学ぶだろう。しかし、“ΑΚΟΥΟΙΣΑΝΣΑΦΕΣΤΕΡΩΣ”という長い文字列を見た時に、“Σ”の働きがはっきりとはしなくなる。そこで教師は、“ΣΑΜΟΣ”という単語を示す。それにより児童は“Σ”が単語の冒頭にあって母音をその後に従える場合と、語末にあってそ

の後には文字が来ない場合があることを学ぶ。その後、長い文字列に再び向かい、雛型の“ΣΑΜΟΣ”と照らし合わせることによって、“ΑΚΟΥΟΙΣ ΑΝ ΣΑΦΕΣΤΕΡΩΣ”と単語を区切り、最初の“Σ”と最後の“Σ”は語末であり、三つ目の単語の冒頭の“Σ”は母音の“A”が続いているということを識別する。さらに“Σ”が別の子音“Τ”と繋がることも理解する。こうして児童は“Σ”の文字を習得する。

簡単なものと複雑なものとを並置させ、それらにある同一性を認識させるという手続きは、『国家』における正義探究に用いられた国家と魂の類比の方法を思い起こさせる<sup>2</sup>。『国家』においては小さな文字より先に大きな文字を読むことが提唱される。小さな文字とは魂における正義であり、大きな文字とは国家における正義である。この両者が同一であることが、文字の類比を成り立たせている。すなわち、『国家』の問答をリードするソクラテスによれば、手元にある小さな文字が読めない時、別のところに大きなもののうちに大きく書かれた同じ文字があることに気づくならばそれを読むだろうという (2. 368d)。この類比は大きく書かれた文字と小さく書かれた文字が同じものであること、つまり同一性に基づいて成り立っている。比喻を語るには異なったもののうちに同一性ないし類似性を見出す必要がある。だから巧みな比喻を語るには、同一性を見抜く知性が求められる。

他方、先の引用にみられたように、雛型は同一性から出発するのではない。同一性（と差異性）の認識へと至ることを目指すのであり、それが認識された時、雛型が成立する<sup>3</sup>。この点で、雛型の方が探究にとってはより適切だと言えるかもしれない。なぜなら比喻は、まず同一性を見出す必要があり、それに成功するのはその能力のある者であるが、それに対して、雛型の場合は、探究の初めに同一性を見出すことは求められないからである。そもそも機織り術と政治術は、少なくとも当初は似ているとも言い難い。

しかし探究対象に適切な雛型を見出すことはどのように可能なのか。あるいは、別言すれば、どうして機織り術が政治術の雛型として選ばれるのか。児童の字母の学習という雛型の雛型が示しているように、適切な雛型を選ぶことができるのは、字母について知っている教師の役割である。とするならば、政治術やより大きなものの探究をする際に、誰が教師となることができるのだろうか。いやそのような者がいたとするならば、その人によって導かれる問答は探究ではなく、知識の伝達に過ぎないのではないか。あるいはそのような者がいなかった場合、適切な雛型候補を選べないとするなら、やはり探究はうまくいかないのではないか。

『ソピステス』の雛型を見てみよう。『ソピステス』においてソフィストの雛型として選ばれるのは魚釣り師である。なぜ魚釣り師が選ばれたのかと言えば、どちらも狩猟術に

<sup>2</sup> Figal (2017, 142) は大文字と小さい雛型との比較し違いを指摘している。その違いは、『国家』の方法では探究の対象が小さな文字である魂における正義であるが、『政治家』では大きなものつまり政治術であるということである。が、そのことの持つ意味については語っていない。

<sup>3</sup> それ故、比喻と雛型の類似性を強調する Larsen (2022) のような解釈は正しくない。

属するからである。ソフィストと魚釣り師は、どちらも狩猟をすることで共通性が捉えられている。それゆえ魚釣りをソフィストの雛型とすることは、実は『国家』の場合と同じく同一性に基づいてのものだと言えるかもしれない。ただし、『国家』における国家の正義と魂の正義の同一性の根拠は、少なくとも類比の方法が提唱されている時には、全く示されない。議論が進んで、国家の性格がその国に住む住民の魂の性格に由来すると言うことが言われ、二つの正義の同一性が因果関係にあることがようやく示唆される (4. 435e)。それに対して、魚釣り師とソフィストとがどちらも狩猟者として捉えられるのは、技術の分割の最中のことである (221d)。それゆえ同じエイドスに属するものとして、魚釣り師とソフィストには同一性ないし類似性が早い段階で確保されていると言えるだろう。ただし、ソフィストが狩猟者であるというのは、狩猟という言葉のある種の転用 (メタフォラ) であるので、それはやはり比喩に近いと言うこともできる。

では『政治家』ではどうなのだろうか。『政治家』では政治術の雛型として選ばれるのは——いやここは言葉を正確に使うべきだろう。すなわち引用に明らかなように、雛型が成立するのは、それと探究対象のより大きなものとの間にある諸要素の同一性が確認される時である。機織り術が選ばれた時は、まだ雛型として成立しているわけではなく (テキストは雛型と呼んでいるが) 正確には雛型の候補というべきであろう——機織り術である。そしてこの両者は特に、編み合わせという点で、その類似性ないし同一性が確保される。だがこの編み合わせという観点は対話篇の最後に出てきているのであって、技術の分割の際には出てきていない。そもそも『政治家』冒頭の知識の分割に従えば、機織り術は命令的知識ではないし、純知的知識でもない。それは手仕事の術であり、政治術とは最初の分割 (258e) で隔てられている技術の一つである。つまり非常に離れている。にもかかわらず、機織り術は政治術の雛型候補として選ばれる。

しかしこのこと、つまり機織り術が政治術から遠く離れているにもかかわらず、政治術探究の雛型候補に選ばれているのは、もちろんプラトンの意図に基づく。上に引用したテキストにあるように、「異なった、離れているもの」の中に同一性を見出すべきだからである。

このことを確認した上で、機織り術が雛型候補として挙げられる部分を見てみよう。

**エレアからの客人** それではいったい人は、政治術と同じ問題性を孕んでいる、どんな極めて小さい雛型を並置すれば、探究の対象を十分に見出すことができるだろうか。(279a7–b1)

ここに雛型候補のもう一つの条件が出ている。それは「同じ問題性を孕んでいる」ことである。従って雛型候補の選定の条件は、今までの議論と合わせて、以下の三つであると言えるだろう。すなわち、小さいこと (278e) あるいは極めて小さいこと (279a–b)、同じ

問題性を孕んでいること (279a7-b1)、離れた別のものであること (278c) である。

これらの条件のうち、小さいのは扱いやすくまた識別しやすいからだろう。そして識別しやすければ、それだけ間違える可能性が少なく、探究の最初として適切である<sup>4</sup>。

雛型の条件の二つ目は同じ問題性を孕むという点だが、これは政治術の探究が頓挫してしまったのと同じ問題性を孕むということだろう。政治術には、それとは別の技術でありながら政治術だと称するさまざまな技術が、政治術ともつれ合っていて、そのために政治家の姿が未だはっきりしていない。それと同じように X という技術だと自称する Y, Z の技術ともつれ合っているような技術 X が選ばれる必要がある。この点を示すことは、雛型候補の選定に必要となるのは、逆説的にも分割の頓挫という事態だということである。少なくともこの『政治家』ではそう言っていないのではないだろうか<sup>5</sup>。雛型は分割の失敗をも意味あるものとして捉え直すことを可能にするのだ。

しかし、離れた別のものであることはなぜ雛型候補選定の三つ目の条件となるのだろうか。これに答えるのは、物語 (μῦθος) であるように思われる。客人の語る物語は、天体の逆回転、クロノスの統治、人間はかつて地上から生まれた、という三つの言い伝えをもとに、客人が構成したものである。その構成の細部が完全には明瞭ではないため、物語において語られている天体の正回転と逆回転の時期を二期とするか三期とするか解釈が分かれている<sup>6</sup>。ここでは物語全体の解釈には踏み込まない。物語を扱うのは、あくまで、我々が問題にしている雛型候補の選定をめぐる疑問を解決するためである。そしてここで提唱したいのは、物語が雛型成立の基盤を示しているのではないかということである。

客人らが生きる (とはつまり我々もまた生きている) 時代は、ゼウスの時代と呼ばれる。この時代は、宇宙からの神の離脱と、個々の人間の生きる面倒を何くれとなく見てくれていたダイモンらの離脱によって始まる。そして、宇宙はそれまでの回転とは逆の回転をし始めることとなる。当初、宇宙はそれまでの神々の世話の記憶をもとになんとかそれ自らだけで生きていくが、次第にその記憶も薄れ、綻びが出始める。行き着く先は、非類似の海への沈没である。

しかし今現にある宇宙は、少なくともプラトンの『ティマイオス』などに示されている宇宙は、そうではないのではないだろうか。いや『政治家』においても、宇宙は「現在見られるとおりの秩序ある姿に到達 (273b)」しているのである、それ以前には、無秩序きわまりないありさまを呈するものであったのだとしても。とするならば、もし神がこの宇宙を完全に見放していたならば、それは崩壊していただろうから、秩序ある宇宙が保たれ

<sup>4</sup> 探究の出発点で間違えるわけにはいかない (278e)。

<sup>5</sup> Lane (1998, 44-5) は、政治家の分割による探究が失敗したのは『ソピステス』の探究と違って雛型を用いなかったからと述べる。しかしそこまで言うことはなかろう。むしろ雛型は、分割の失敗を糧にしていることに着目すべきであると思われる。

<sup>6</sup> 三期だと主張するのは、Rowe や Brisson である。

ている限り、宇宙の操舵者は臨在していると判断できるのではないだろうか。また、宇宙は不老不死になるとも言われている（273e）。これは再びクロノスの時代が帰ってくることはないと思われる<sup>7</sup>。もし二王朝（あるいは神の顕在と不在の時期）が交代することが永遠に続くと考えられていたのであれば、そもそも不老不死になるなどとわざわざ言う必要はなかろう。不老不死は永劫回帰ではない。神は宇宙を気遣っているのだ。

またその他の神々から人間に対して技術が付与されたことも語られる。クロノスの時代には、ダイモンらは何くれとなく面倒を見てくれていたのだが、彼らが去り、人間は困難のうちに置かれるままになっていた。そのような状態をみるに忍びない神々から、技術が人間に伝えられる。神々は人間への関心を持っているのだ。このように、宇宙は神によって操舵されており、宇宙の操舵者が再び宇宙をコントロールすることと並行的に（274e）、人間は神々の関心を得ている<sup>8</sup>。

客人自ら、物語の意図は競合する技術の存在を明らかにすることと、養育と世話の違いを明らかにすることであったと述べている（275b）。しかしそれだけではなくて、上に述べた解釈が正しいならば、この物語は人間の宇宙における位置を明らかにしているのではないだろうか。類似と非類似のせめぎ合う中で、技術という神々に与えられたものを使って自分たちで生きていくという人間の姿を示していると考えられるのである。養育をもその下に含むものとして世話を捉えた客人は、長大な物語を通して、世話と養育とを区別し、人間が、何もかもしてもらった状態から自分で行う状態へと、ただし全く神々のご加護がないわけではなく、宇宙は非類似の海へと沈没するのを防がれつつ、人間はその宇宙の中で神々によって与えられた火や技術によって生き抜いていく、そういう人間の姿を示しているのである。

このように物語を解することによって提唱したいのは、宇宙における類似が雛型を成立させる根拠になっているのではないかということである。宇宙における類似こそ、雛型候補が探究対象のより大きいものから「離れていても」雛型として成立する根拠なのではないだろうか。極めて小さくて離れているものを取り上げても、探究対象との同一性を持つパターンがあることが期待される。それは物語で示されているように、この宇宙は非類似の海へと埋没するのを神の操舵によって押し留め、それにより類似と非類似がせめぎ合っているからである。だから何をとっても何かしら似ているとさえ言えるのではないか。

もちろん雛型候補は何でもよいわけではない。第二の条件に、同じ問題性を孕むという

---

<sup>7</sup> Rowe (1995, 196) や Betegh (2021, 75) は、クロノスの時代に帰ると解釈する。

<sup>8</sup> 以上の解釈は Brisson のそれと重なる。つまり Brisson は今（とはつまり客人と若いソクラテスが対話している時）、ゼウスが宇宙全体の運行を支配しているが、ただし個々の部分を神霊が配慮しているわけではないという時代と捉えている。そして「神性と偶然が共存している宇宙」が今の宇宙であるという（Brisson, 361）。ただし三期説をとるかどうかは、私自身はまだ決めていない。

ものがあるからである。それでもある程度の選択の候補はあるだろう。実際、機織り術以外にも、政治術が政治術と称するその他の技術ともつれ合っているのと同じような技術はあるだろう。とはいえ、より適切な雛型があるのであり、より適切な雛型を選べる人が、より問答法に長けた者であるということになるだろう。

以上のような議論によって、ようやくにして雛型の意義が明確になったと思われる。プラトンの探究方法の推移を振り返ってみると、同一性に基づいた類比の方法から、同じエイダスに属する雛型を用いる方法を経て、同じ問題性を孕む、離れた小さなものを雛型として選ぶ方法に至った。そしてこの推移は、『政治家』で提唱されている雛型が探究の開始をより容易なものにしていることを示している。なぜなら、同一性を探究の最初から求めることもなく、また分割が失敗してもむしろその失敗に現れている問題性を梃子に雛型候補を定めることができるからである。

さてそれでは、もう一つの問題、すなわち雛型によって明らかになるのは、知識ではなく真なる思いであると言われていた点についてはどうだろうか。これだけ周到に構築されている雛型の方法を用いて得られるのが知識ではなく、真なる思いに過ぎないのはいったいどういうことなのだろうか。

この問題に対して Bronstein (2021, 108–9) は、全体論的解釈を提示する。つまり全部を知らないならば、知ったとは言えないという解釈である。しかし難点は、全てを知る人間はいるとは考えられないのみならず、そもそもプラトンは知の成立を確かに述べていることである (284b7)。

文脈を省みると、もう一つの可能性が見えてくるように思われる。すなわち雛型の方法は、エイダスに即した分割と共になければ、真なる思いなしにとどまるのではないかという解釈の可能性である。つまり、なぜ真なる思いなしに止まるのかといえば、それは雛型と探究対象のすり合わせだけでは、*οὐσία* との連関が確保されていないからではないだろうか。政治術の雛型候補として機織り術を取り上げた直後、客人が提唱するのは、政治術の探究の途上が頓挫した地点まで、機織り術のエイダスをたどることである。これにより、機織り術の何であるかを明らかにし、そうすることで機織り術の *οὐσία* が把握される。すでに政治術については、そのエイダスに即した分割が、途中までとはいえ、なされていた。雛型候補と探究対象は、そのどちらもがエイダスに即した分割に支えられて、初めて真なる思いなしから知に至ると考えられる。

### 3: 適度、適時

主原因と副原因とを区別することが機織り術の明確化に役立ったのだから、次に求められるのは政治術が対象とするものにまつわる主原因と副原因の区別であろう。ところが客人はそちらの方向に議論を進める前に、なぜ機織り術を簡単に規定することができたのにそれをせずにいたかを弁明するかのように「適度(τὸ μέτριον)」へと話を展開する (283b)。

適度があれば技術があり、またその逆に技術があれば適度がある。どちらか一方がなければ、他方はない。適度と技術は一蓮托生である (284d)。

それほど重要視されている適度であるが、その説明には、客人が『ソピステス』における「ないもの」があることを示そうとする五つの類をめぐる議論よりも困難である (284c) と明言するほど難しいところがあるようには感じられないかもしれない。というのも、例えば、より大きいものとより小さいものとが相互に比較されるだけではなく、ある基準に照らしてそれより大きいあるいは小さいと言われることがあるが、そのような基準のことを適度と呼ぶと了解しておけば済むようにも思われるからである。もちろん、ある具体的な場面における適度がどのようなものであるかは、その適度によって成立する当の技術が明らかにするものであるだろうから、専門的知識が必要であろう。だがそうであるならば、その適度の理解や明確化、さらにはそれに基づく判断は、専門家に任せておけばよいのであって、さしあたって問答を進めるにあたっては、相互の比較とは異なる絶対的基準としての適度があるという理解で十分であるとも思われる。

しかし客人の熱心な語りは、そのような理解では不十分であることを示しているのではないだろうか。そこで、適度についてより深く理解するために、適度がその他の仕方で呼ばれているテキスト上の事実をまずは確認しておきたい。

適度は、「適切 (*τὸ πρέπον*)」「適時 (*ὁ καιρός*)」「べし (*τὸ δέον*)」「中庸 (*τὸ μέσον*)」と呼ばれている (284e6-7) が、その他に、「適度の生成に照らして (*πρὸς τὴν τοῦ μετρίου γένεσιν*: 284c1, 284d6)」や「生成の必然的な有に照らしてのもの (*τὸ δὲ κατὰ τὴν τῆς γενέσεως ἀναγκαίαν οὐσίαν*: 283d8-9)」とも表現されている。これらのうち、最後の二つの表現は印象的である。しかも最後のものは、適度が論じられる箇所最初に出てくるものであるがわかりにくい曖昧な語句で、若いソクラテスがどのような意味か説明を求めるのも当然であろう<sup>9</sup>。しかしこれらの語句が、「相互に照らして (*πρὸς ἄλληλα*)」と対になって用いられていることは、どれも「適度」として理解すべきであることを告げている。

そうするとまず、適度の生成が適度と同じものを指すとするならば、適度は生成しなければならないということになるのではないだろうか。客人がしきりに述べる話の長さについて考えてみよう。話が長いか短いかは、前の校長の話は長かったが今の校長の話は短くて楽などという相互による比較もあるが、客人が今現に行っている政治家・政治術の探究の議論が長いか短い適切であるかは、問答法が技術であるならば適度によって図られるべきである。ではその適度とは何か。それは一連の対話によって政治家の姿がこの上なく明瞭に描かれることではないだろうか。対話の結果、政治家が明瞭に捉えられたならば、それまでの対話や議論は適度に適ったものと判定されるべきなのではないだろうか。

そのことを客人は、第一に尊重すべきは話の長さ短さではなくて、「エイドスに即して

<sup>9</sup> Rowe, 1995, 207.

分割することができるようになるその方法 (286d9)」だと述べている。もちろんこれは「言うは易く行うは難し」の類であって、『政治家』の対話そのものは常にエイドスに即して分割できていたわけではないし、物語の長さは語った客人本人がうんざりするようなものでもあった。しかし対話篇の最後が王者や政治の完全な姿を見事に描いたという称賛の言葉で終わっている<sup>10</sup>ように、対話の探究対象であった政治家が明瞭に捉えられている以上は、対話全体は適度に適ったものと言うべきであろう。

ここで注意して良いのは、対話の長さの適度が探究対象の明確な叙述の実現にあるのならば、適度であるかどうかを判明するのはまさに対話が終わったその時であるということである。何をどのように話すべきか、言い換えれば何をどのように分割するべきかの判断の適切さは、後になって、つまり時が経ってわかる。

政治もまたそのような側面があるのではないだろうか。政治術に含まれるものとして、その他の技術を用いるべきかどうかの判断があることが指摘される。そしてその上で政治家は、弁論術や統帥術を用いるかどうかなどの「国家における最大の事柄の開始と発動 (305d)」に関して、時宜に適っているか (ἐγκαιρία)、それとも時宜に反しているか (ἀκαιρία) の判断を下す (305d)。この政策決定の判断の善悪は、やはり時が経ってわかる。回顧的に了解される判断の善をあらかじめ想定できること、これが先見の明のある人であり、そのような人こそ政治家に相応しい、あるいは政治の技術を持っている人ということになるだろう。後に実現する善をあらかじめ知っている者が、誠に知者の名にふさわしい。

そしてこのような政策決定は、畢竟、ある時点での選択に帰着するだろう。戦争を行うべきかどうか、国民を説得すべきかどうかなどの判断は、戦争を行う方が善いのかそれとも平和交渉を行う方が善いのかの選択であり、国民を説得する方が善いのかむしろ知らしむべからずの方が善いのかの選択である。適時というのは、いくつかある選択肢のうちからその時の最善を選ぶことではないだろうか。

そうであれば、善についての理解が深まれば深まるほど、適時を捉えることができるということになるだろう。そして善の理解が深まるには、問答法に、エイドスに即した分割に、より長けた者になるのが求められるのではないか。例えば、エルの神話における生の選択がそのような視点を提供していると思われる。エルの神話によれば、善い生を選ぶには、魂の本性を知るべきであり、またさまざまな条件、すなわち富、健康、氏素性、私人か公人か、物分かりの良さ悪さ、などが、どのような善いことと悪いことを作り出すかを知らなければならず、そういったものを知った上で、魂がより善くなる生涯を善い生涯と呼んで、善い生涯を選ぶよう努めることが推奨される (『国家』 10. 618c-e)。より善い生

<sup>10</sup> どちらのソクラテスなのだろうか。対話篇全体のまとめの言葉と受け取るならば、若いソクラテスではなく、ソクラテスの方が相応しいだろう。しかしそうであるならば、『哲学者』が書かれないことの宣言であるとも受け取れるかもしれない。

の選択に必須のこれらの知識は、問答法において他のものによって得られるものではないとプラトンならば主張するだろう。

しかしながら、これだけでは足りない。なぜならば、さまざまな選択肢のうちから最善のものを選ぶ際に、もし適度が欠けていれば、その選択はより善いものとより悪いものとの相互比較に墮してしまう危険性があるからである。先ほど我々が確認した表現を用いれば、適度は生成しなければならぬが、しかしその適度とは「生成の必然的な有に照らしてのもの」でなければならぬ。言い換えれば、適度それ自体は生成ではなくて有なのである<sup>11</sup>。

それではそのような有としてどのようなものが考えられるだろうか。残念ながら『政治家』にはそのようなものが語られてはいないようだ<sup>12</sup>。だが、『ピレボス』にはそれに値するものがあるのではないかと論を閉じるにあたって最後に提案しておきたい。

『ピレボス』の最後の方で、混合の生に全ての知識と一部の快楽が混ぜ合わされるべきことが示された後で、ソクラテスは「私には、この議論が魂を持つ身体を美しく支配する非物体的なある秩序として仕上げられているように思われる (64b6-8)」と述べる。ソクラテスの自画自賛は珍しいがそれに値するだろう。なぜならば、混合の生、四つの類、欲望の分割、知識の分割、それらを踏まえての混合、つまり宇宙の分割とそれに基づく快楽と知識の種類分け、それらが相互に正しくかつよく働き合う混合の発見、これらをプロタルコスとともに問答法によって行ったソクラテスは、あるべき混合の仕方というモデルを構築することが、今後の人間の生のそれぞれの場面において、そのような混合を維持する仕方、あるいは構築する仕方、より善いものを選択すべきということをはっきりと示したからである。混合の生のモデルは今や善の選択の基準となった。この基準こそ「生成の必然的な有」であり、それに従って善き生を実現することこそ「適度の生成」なのである。

## 文献表

- Betegh, Gábor, 2021, 'The Myth and What It Achieves: 286d5–277c6'. in Panos Dimas, Melissa Lane, and Suan Sauvé Meyer. eds. *Plato's Statesman*. Oxford: Oxford University Press. 71–93.
- Brisson, Luc, 1995, 'Interprétation du mythe du *Politique*'. in Christopher J. Rowe. ed. *Reading the Statesman: Proceedings of the III Symposium Platonicum*, Sankt Augustin: Akademia Verlag, 349–363.
- Bronstein, David, 2021, 'Learning from Models: 277c7–283a9'. in Dimas, Lane, and Meyer. eds.

<sup>11</sup> それゆえ『ピレボス』で言われているように、快楽が生成であるならば、それは適度にはなりえない。

<sup>12</sup> 『政治家』の最後に論じられる、勇気と節度という「相反する」二つの徳性（ないし性質）を持つ人々の編み合わせというのがその候補になるかもしれない。

- Plato's Statesman*. Oxford: Oxford University Press. 94–114.
- Figal, Günter, 2017, 'Finding the Right Concepts: On Dialectics in Plato's *Statesman*'. in John Sallis, ed. *Plato's Statesman: Dialectic, Myth, and Politics*. Albany, NY: State University of New York Press. 137–147.
- 加藤信朗, 1992, 「『ポリティコス』篇における「雛型 (παράδειγμα) (パラダイグマ)」の論法について」, 『哲學』42号, 55–75.
- Lane, M. S., 1998, *Method and Politics in Plato's Statesman*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Larsen, Jens Kristian, 2022, 'Using Examples in Philosophical Inquiry: Plato's *Statesman* 277d1–278e2 and 285c4–286b2'. in Jens Kristian Larsen, Vivil Valvik Haraldsen, and Justin Vlasits, eds. *New Perspectives on Platonic Dialectic: A Philosophy of Inquiry*. London and New York: Routledge. 134–151.
- Rowe, C. J., 1995, *Plato: Statesman with Translation and Commentary*, Warminster: Aris & Phillips, Ltd.

## 後記

「問答法と時」というタイトルを掲げながら、一方には問答法の解明と、他方には問答法と時との関わりとのバランスが今一つ取れていないことをセミナー当日の発表の際にも感じていた。それを是正すべく、当日いただいた質問への答を少しでも精緻にしながら編み込み書き直す所存であったが、残念ながら当日読み上げた原稿ほぼそのまま Web 上で発表せざるを得ない。改稿するとは text を解きほぐし再び編み合わせることに他ならないだろうが、そうすることでかろうじて成していた形を失ってしまうより、たとえ見すばらしい布切れでもまだましであるとの判断に基づいている。

納富信留氏の政治術の具体的な仕事としての勇気と節度の編み合わせと時との関係についての問い、栗原裕次氏の「物語」を雛型の根拠として読みうるかどうかについての問い、岩田直也氏の『政治家』という対話篇は（また合わせて『ソピステス』も）探究というより教示ないし説得ではないかという問い、さらには高橋久一郎氏の「生成の必然的な有」と「適度の生成」をめぐるより詳細な説明を求める問い、それら全てに感謝しつつ、セミナー当日以上のこちらからのお答えは、今後とさせていただきます。